

## 8. 鳥類調査まとめ

### 1) 湿地性希少鳥類

湿地性希少鳥類であるサンカノゴイ、ヒクイナ、オオセッカ、コジュリン、ヨシゴイ及びチュウヒの6種について、各調査項目（湿地性希少鳥類調査、鳥類調査及びヨシ原造成完了後の事後調査）の調査結果をまとめた。各種の出現状況を以下に述べる。

#### (1) サンカノゴイ

##### (ア) 各調査月の出現状況

各調査月の確認例数を表3-5-1に、全調査項目での確認位置を図3-5-1に示す。なお、調査項目によって調査を実施した月は異なる。

確認例数の合計値をみると、北部は86例、南部では47例と北部で多かった。北部では4月から6月の繁殖期に確認例数が多く、それ以降は7月に2例、8月に3例と減少し、9～1月には確認されなかった。確認地点は、長門川合流点付近の両岸に集中していた。南部では、4月及び5月に確認例数が多く、6月は1例、1月は2例であった。確認地点は、北部のように出現が集中する地域はみられず、沼西側の堤防沿いに広範囲に生息していた。

なお、造成地区の北須賀地区及び大竹地区では確認されていない。

表 3-5-1 各調査月におけるサンカノゴイ確認例数

区域 <sup>注1)</sup>	調査月								合計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	1月	
北部	30	21	30	2	3	0	0	0	86
南部	31	13	1	0	0	0	0	2	47

注1) 北部:北印旛沼の甚兵衛大橋から北側の地域、南部:甚兵衛大橋から南側の地域(甚兵衛広沼)

注2) 各調査項目で実施した調査月は以下のとおりである。

列車走行に伴う鳥類衝突調査:6月(計1回)

踏査及び定点調査:4～8月(計5回)

ラインセンサス調査・定点調査:4～6月、9月、1月(計5回)

ヨシ原造成工事完成後の事後調査:4～8月、10月、1月(計7回)

(イ) まとめ

鳴き声 (Booming) または目視による確認例数を表 3-5-2 に示す。

北部では、繁殖期を通してサンカノゴイの生息が確認された。鳴き声 (Booming) の確認例数は4~6月に多く、7月以降は鳴かなかった。また、目視の確認例数では、6月に10例と最も多く、繁殖期の4~5月と7~8月は2~4例と少なかった。

南部では、繁殖期の4~6月と冬季に生息が確認され、鳴き声による確認がほとんどであった。

繁殖にかかわる内容として、北部、南部共に雄の鳴き声を確認された。また、北部では5、6月に堤外地のヨシ原と水田地帯を往来する個体が観察された。これはヒナへの給餌のために餌運びを行っていたと考えられる。幼鳥は確認されなかったが、繁殖の可能性は高い。南部では目視による確認例数が少なく、繁殖状況は不明である。



写真 3-5-1 サンカノゴイ確認個体

表 3-5-2 鳴き声 (Booming) または目視の確認例数

調査月	鳴き声 (Booming) の確認例数 <sup>注1)</sup>		目視の確認例数	
	北部	南部	北部	南部
4月	26	30	4	2
5月	18	13	3	
6月	20	1	10	
7月			2	
8月			3	
9月				
10月				
1月				2
合計	64	44	22	4

注1) 目視した際に鳴き声 (Booming) を確認した場合も含む。

注2) 北部: 北印旛沼の甚兵衛大橋から北側の地域  
南部: 甚兵衛大橋から南側の地域 (甚兵衛広沼)

過年度の調査結果との比較を表 3-5-3 に示す。

鳴き声 (booming) の確認状況から推定すると、推定つがい数は14つがい (北部

6つがい、南部3つがい) 前後であると考えられる。

表3-5-3に示したとおり、北部は例年どおりの生息数であったと考えられる。一方、減少傾向がみられていた南部では、鳴き声による確認例数が増加した。しかし、北部のように4月以降も鳴き声が集中する地域は少なかった。

また、イギリスでは、繁殖期におけるホームレンジサイズ<sup>3</sup>は14.60ha(10例の平均値)と報告されている(Gilbert et al,2005)。これを本調査結果に方形で仮にあてはめたものを図3-5-2に示す。

南部ではイギリスでのホームレンジサイズに近い行動圏を示唆する確認状況であったが、北部では昨年度(平成21年度)同様、比較的近い地域で2~3個体の鳴き声(booming)が確認された場合もみられ、生息密度が高いことが示唆された。

表 3-5-3 過年度の調査結果との比較(雄の鳴き声)

調査年度	雄の鳴き声の確認状況		
	北部	南部(甚兵衛広沼)	計
平成15年度 <sup>注1)</sup>	3地域	8地域	11地域 <sup>注2)</sup>
平成16年度 <sup>注1)</sup>	6?地域	4地域	10地域 <sup>注3)</sup>
平成17年度	6~7個体程度	2地域+5個体程度	注4)
平成18年度	6個体前後	6個体前後	12個体前後
平成19年度	4個体前後	5個体前後	9個体前後
平成20年度	4個体前後	1個体前後	5個体前後
平成21年度	6個体前後	3個体前後	9個体前後
平成22年度	6個体前後	8個体前後	14個体前後

注1)平成15年度16年度の地域数は、各月(4、5、6月)のうち、計数の最も大きな月の数値を示した。

注2)「1地域の中でも複数の鳴き声の確認される場合があり、少なくとも15個体程度の雄が生息していると考えられる」との記述がある(成田高速鉄道アクセス株式会社,2005)。

注3)「北部での9~10個体の確認記録に甚兵衛大橋以南の鳴き声数を加えて、合計で少なくとも17個体以上が生息していると考えられる」との記述がある(成田高速鉄道アクセス株式会社,2005)。

注4)記述なし(復建エンジニアリング,2005)。

<sup>3</sup>動物が単に、日常的に動き回る範囲で、テリトリー(なわばり)と区別する(生態学事典,2003)。移動・分散中の空間は含めず、ほかの個体に対して防衛するかどうかは問わない(岩波生物学事典第6版,1996)。

図 3-5-1 サンカノゴイの確認位置（全調査項目）

図 3-5-2 サンカノゴイの生息状況の推測（全調査項目）

貴重種保護の観点から確認位置・記録等については公表しないこととしています

## (2) ヒクイナ

各調査月の確認例数を表 3-5-4 に、全調査項目での確認位置を図 3-5-3 に示す。なお、調査項目によって調査を実施した月は異なる。

各区域における確認例数の合計値をみると、北部は 21 例、南部では 64 例と南部で多かった。目視による確認例は少なく、ほとんどが鳴き声による確認であった。

北部では、長門川合流点付近での確認が多い。北東側の堤内地ではヒナが確認されたことから、ほかの確認地点においても繁殖の可能性がある。

南部では、広範囲に生息し、堤外地ヨシ原での確認が多い。繁殖期を通して生息が確認されたことから、繁殖の可能性がある。

本種は夏鳥として渡来し、渡来当初である 4～5 月には活発に鳴くものと考えられる。そのため、6 月以降は確認例数が減少している。また、1 月調査において、南部地区では目視により 5 例が確認されたことから、少数が越冬していると考えられる。

造成地区の北須賀地区では、今年度に造成区域を利用する個体が確認された。ヨシ原が本種の生息できる環境に近づいていることがうかがえる。

表 3-5-4 各調査月におけるヒクイナ確認例数

区域 <sup>注1)</sup>	調査月								合計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	1月	
北部	6	7	7	0	1	0	0	0	21
南部	29	16	6	1	1	4	2	5	64

注 1) 北部: 北印旛沼の甚兵衛大橋から北側の地域、南部: 甚兵衛大橋から南側の地域(甚兵衛広沼)

注 2) 各調査項目で実施した調査月は以下のとおりである。

列車走行に伴う鳥類衝突調査: 6 月(計 1 回)

踏査及び定点調査: 4～8 月(計 5 回)

ラインセンサス調査・定点調査: 4～6 月、9 月、1 月(計 5 回)

ヨシ原造成工事完成後の事後調査: 4～8 月、10 月、1 月(計 7 回)

図 3-5-3 ヒクイナの確認位置（全調査項目）

貴重種保護の観点から確認位置・記録等については公表しないこととしています

### (3) オオセッカ

各調査月の確認例数を表 3-5-5 に、全調査項目での確認位置を図 3-5-4 に示す。なお、調査項目によって調査を実施した月は異なる。

各区域における確認例数の合計値をみると、北部は 138 例、南部では 59 例と北部が多かった。

確認例数は、北部、南部共に 4 月に多く、北印旛沼の広範囲で確認された。渡りの時期であるため、繁殖へ移動途中の個体が多数含まれている可能性が高い。一方、5～8 月には北印旛沼北東側で集中してみられ、8 月までさえずりが確認された。繁殖の可能性はある。

本種は国内の限られた地域で繁殖し、冬期は関東以南で越冬する。調査地では、冬季に北部及び南部で生息が確認されたため、少数が越冬していると考えられる。

なお、造成地区の北須賀地区及び大竹地区では確認されていない。

表 3-5-5 各調査月におけるオオセッカ確認例数

区域 <sup>注1)</sup>	調査月								合計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	1月	
北部	83	12	18	10	9	0	0	6	138
南部	51	0	1	0	0	0	0	7	59

注 1) 北部: 北印旛沼の甚兵衛大橋から北側の地域、南部: 甚兵衛大橋から南側の地域(甚兵衛広沼)

注 2) 各調査項目で実施した調査月は以下のとおりである。

列車走行に伴う鳥類衝突調査: 6 月 (計 1 回)

踏査及び定点調査: 4～8 月 (計 5 回)

ラインセンサス調査・定点調査: 4～6 月、9 月、1 月 (計 5 回)

ヨシ原造成工事完成後の事後調査: 4～8 月、10 月、1 月 (計 7 回)



写真 3-5-2 オオセッカ確認個体

図 3-5-4 オオセツカの確認位置（全調査項目）

貴重種保護の観点から確認位置・記録等については公表しないこととしています

#### (4) コジュリン

各調査月の確認例数を表 3-5-6 に、全調査項目での確認位置を図 3-5-5 に示す。なお、調査項目によって調査を実施した月は異なる。

各区域における確認例数の合計値をみると、北部は 146 例、南部では 26 例と北部での確認がほとんどであった。

以前は北部の東側堤防沿いで確認されていたが、現在では加えて北東側の堤内地に生息するようになり、確認例数も多い。全体としては、減少傾向はみられない。

南部では、以前から個体数は少なく、春季や秋季以降に記録される。多くは通過個体であると考えられるが、6 月には北印旛沼合流点のヨシ原で雌雄が確認されており、繁殖している可能性もある。

繁殖にかかわる内容として、北部ではさえざりが毎月確認されたほか、6 月と 8 月には餌運びが観察された。また、7~8 月には幼鳥や巣立ち後間もない幼鳥への給餌行動が観察されたことから、繁殖の可能性は高い。

本種は国内の限られた地域で繁殖し、冬期は本州中部以南で越冬する。調査地では、冬季に北部及び南部で生息が確認されたため、少数が越冬していると考えられる。

造成地区の大竹地区では、平成 21、22 年度に造成地を利用する個体が確認された。確認例数は少ないが、ヨシ原が本種の生息できる環境に近づいていることがうかがえる。なお、北須賀地区では確認されていない。

表 3-5-6 各調査月におけるコジュリン確認例数

区域 <sup>注1)</sup>	調査月								合計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	1月	
北部	27	25	28	23	32	6	0	5	146
南部	13	1	2	0	0	3	0	7	26

注 1) 北部: 北印旛沼の甚兵衛大橋から北側の地域、南部: 甚兵衛大橋から南側の地域(甚兵衛広沼)

注 2) 各調査項目で実施した調査月は以下のとおりである。

列車走行に伴う鳥類衝突調査: 6 月(計 1 回)

踏査及び定点調査: 4~8 月(計 5 回)

ラインセンサス調査・定点調査: 4~6 月、9 月、1 月(計 5 回)

ヨシ原造成工事完成後の事後調査: 4~8 月、10 月、1 月(計 7 回)



写真 3-5-3 コジュリン確認個体

図 3-5-5 コジュリンの確認位置（全調査項目）

貴重種保護の観点から確認位置・記録等については公表しないこととしています

## (5) ヨシゴイ

各調査月の確認例数を表 3-5-7 に、全調査項目の確認位置を重ね合わせたものを図 3-5-6 に示す。なお、調査項目によって調査を実施した月は異なる。

各区域における確認例数の合計値をみると、北部は 417 例、南部では 180 例と北部が多かった。

本種は 5 月頃、夏鳥として調査地に渡来し、9 月頃まで北印旛沼全域に生息する。生息数は特に北部が多い。北部、南部共に減少傾向はみられない。

繁殖にかかわる内容としては、北部、南部共に雄による鳴き声や 7～8 月に幼鳥が確認された。幼鳥は北部で多くみられた。また、6～8 月には、堤外地と水田地帯を往来する成鳥が観察されており、ヒナへの給餌のために餌運びを行っていたと考えられる。北部、南部共に幼鳥が確認されたことから、繁殖の可能性は高い。

造成地区の北須賀地区では、平成 21、22 年度に造成区域を利用する個体を確認された。大竹地区では、今年度の調査で造成区域を利用する個体を確認された。ヨシ原が本種の生息できる環境に近づいていることがうかがえる。

表 3-5-7 各調査月におけるヨシゴイ確認例数

区域 <sup>注1)</sup>	調査月								合計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	1月	
北部	0	105	181	54	72	5	0	0	417
南部	0	25	107	10	18	20	0	0	180

注 1) 北部: 北印旛沼の甚兵衛大橋から北側の地域、南部: 甚兵衛大橋から南側の地域(甚兵衛広沼)

注 2) 各調査項目で実施した調査月は以下のとおりである。

列車走行に伴う鳥類衝突調査: 6 月(計 1 回)

踏査及び定点調査: 4～8 月(計 5 回)

ラインセンサス調査・定点調査: 4～6 月、9 月、1 月(計 5 回)

ヨシ原造成工事完成後の事後調査: 4～8 月、10 月、1 月(計 7 回)



ヨシゴイ幼鳥  
北印旛沼北部堤外地

平成 22 年 8 月 5 日撮影

写真 3-5-4 ヨシゴイ確認個体

図 3-5-6 ヨシゴイの確認位置（全調査項目）

貴重種保護の観点から確認位置・記録等については公表しないこととしています

## (6) チュウヒ

各調査月の確認例数を表 3-5-8 に、全調査項目の確認位置を図 3-5-7 に示す。なお、調査項目によって調査を実施した月は異なる。

各区域における確認例数の合計値をみると、北部は 44 例、南部では 83 例と南部でやや多かった。

本種は冬鳥として調査地に渡来するため、5～8 月までの繁殖期にはみられず、4 月と 9～1 月に確認された。9 月から確認例数が増え始め、1 月に最も多く記録された。

北印旛沼の広い範囲を利用していたが、ヨシ原が広範囲に及ぶ沼の北東や南西側で採餌飛翔が多くみられた。

本種はヨシ原内に集団でねぐらをとり、ねぐらは甚兵衛広沼西側の堤外地ヨシ原にある(図 3-1-38)。ねぐらの集中域は例年と概ね同じ位置にあったが、今までは確認されていなかった北部の長門川合流点付近においてもねぐらがみられ、合計 6 個体のねぐら入りを観察された。南部に比べねぐら入りする個体数は少ないものの、南部では減少傾向にあることから、今後は北部においても留意する必要がある。

表 3-5-8 各調査月におけるチュウヒ確認例数

区域 <sup>注1)</sup>	調査月								合計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	1月	
北部	7	0	0	0	0	2	3	32	44
南部	18	0	0	0	0	7	12	46	83

注1) 北部:北印旛沼の甚兵衛大橋から北側の地域、南部:甚兵衛大橋から南側の地域(甚兵衛広沼)

注2) 各調査項目で実施した調査月は以下のとおりである。

列車走行に伴う鳥類衝突調査:6月(計1回)

踏査及び定点調査:4～8月(計5回)

ラインセンサス調査・定点調査:4～6月、9月、1月(計5回)

ヨシ原造成工事完成後の事後調査:4～8月、10月、1月(計7回)



写真 3-5-5 チュウヒ確認個体

図 3-5-7 チュウヒの確認位置（全調査項目）

貴重種保護の観点から確認位置・記録等については公表しないこととしています